

## 還らざる河（シベリア抑留記）

高知県 加納 憲

やがて二十一世紀を迎える。顧みれば二十世紀は各国の覇権の角逐に明け暮れ、戦乱が絶えなかった時代だった。大きな歴史のうねりの中で埋没しそうになりながらも、今こうして生を保っているのは不思議な気がする。

一九二六年生まれの私が、昭和の激動と共にあって、特に敗戦と抑留時代の体験は、国がそうであったように、価値観が一八〇度変わったといっても過言ではない。同年配の、これも特攻隊の人が、毎日敵の戦艦目がけての体当たりの訓練をしていたが、気持ちはどうしても収まらず、それで生死を超えた心の準備をして、これでもう思い残すこともない心境に達した。明日がその出番だという日に突然中止となり、それが終戦の日であった。さて今度は元に戻るまでが大変

だったという話を聞いたことがあった。この話を聞いて、さもありなんと思う。流れ行く河の水は還らない。我々の年代の青春は時代の流れに遭って、再びと戻ってこなかった。

一人のちっぽけな男のミクロな体験を、入隊から抑留引揚げまで書き留め、このような体験は私どもだけに止めたいと願うものである。

※文中の地名・呼称は戦前の呼び名とする。また人物については差し支えない限り本名とした。

### 一・風煙近し（渡満から入隊まで）

一九二六年富山水見の商家の長男として生まれた私は、小学生の頃の満州事変や上海事変また支那事変と日本の軍拡の波及していくのは、「膺懲支那」であり「満蒙は日本の生命線」であるという認識であった。駅舎に貼ってあるポスターの「少年よ行け満蒙大陸へ」は私たちに呼びかけているぐらいに思っていた。

一九三二年満州国が誕生すると、向かいの長男がハルビンに勤め、送られてくる絵はがきを見ながら、大

陸雄飛の夢を見ていた。

旧制の中学に入る頃には支那事変が、そして一九四一年の十二月には太平洋戦争へと突入していったが、これでは日本も大変なことになるぞと身の引き締まるのを覚えた。

町での出征兵士は毎日のようになり、生徒はその度に出されて駅頭まで見送った。戦後五十年も経つと、当時見送りにいった時に歌った軍歌は誰も知らなくなっている。

支那事変の最初の頃は「戦友」の

「ここは御国を何百里　はなれて遠き満州の

赤い夕日に照らされて　友は野末の石の下」

歌が余りにも暗いというので「日本陸軍」の

「天に代わりて不義を討つ　忠勇無双の我が兵は

歓呼の声に送られて　今ぞ出立つ父母の国

勝たずば生きて還らじと　誓う心の勇ましき」

となり、戦局が進むにつれて「出征兵士を送る歌」に代わって本格化し、千人針を持って街頭に立つ女性が自立った。

「わが大君に召されたる　生命はえある朝ぼらけ

讀えて送る一億の　歓呼は高く天を衝く

いざ征け　つわもの日本男児」

その頃中学の進学は、視力のよくて成績のいい者はまず陸士・海兵を選び、体力や視力の自信のない者は高校や私大を受験した。私は満州建国大学を選んだが、幸いにもパスし、一九四四年満州に渡った。途中豊橋予備士官学校で軍事教育を受けた際に、皆が日章旗に寄せ書きをした。私は「草莽の微忠に生きる」と書いた。えらい気負うたことを書いた様だが、当時の心意気だったと思う。

建国大学は満州を形成する五族の塾生活で、言うなれば満州国官吏の養成所だった。学内ではやはり戦時色が濃く、軍事教練や勤労奉仕もこなした。その間、先輩はもちろん同期の一年年上の者が相次いで入隊していった。

新京（現在の長安）にあっても、サイパンやアッツ島の玉砕、本島の爆撃のニュースが伝わると、戦況の厳しさがひしひしと伝わってきて、どうしようもない

ジレンマに陥ったが、国の盾となるのは若い我々しかないと感じた。その時代に読んだ書物は「死」をテーマにしたもの、たとえば「葉隠」とか「武士道」に関するものだった。数え二十一歳の徴兵検査が一年繰り上がり、文科系統の学生は理系と違って猶予なく入隊することとなった。

その頃の学徒出陣には万感の思いを込めて口ずさんだ歌があった。

「鈴懸の径」

「友と語らん 鈴懸の径 通いなれたる学舎の街

やさしの小鈴葉かげに鳴れば 夢はかえるよ鈴懸

の径」

鶴岡独歩入隊

一九四五年五月、在満の男という男はすべて徴集された。私たちは新京神社に集められた。これで大学もあの南湖の柳絮もしばらくおさらばだと名残惜しかった。入隊する者は親戚や知人の激励に感激して紅潮している者が多かったが、単独の私たちには見送り人もなく、自然に不安と緊張で寡黙になった。当日の晴天

が僅かに祝ってくれたのかもしれない。

私の入隊したところは三江省鶴崗（鶴岡炭鉱）独立歩兵七二八部隊（通称浪速部隊）で、隊長は水野大佐だった。鶴崗の街は埃っぽい炭鉱街で、若干の店が点在していた殺風景なところとしか記憶がない。

私と一緒に入った初年兵は、中村（福岡在住）、県（高山在住）、安井（新潟出身）、小山田（山形出身）、大河原（群馬出身）、中川（大阪出身、ピラで死亡）、椎葉（熊本出身）、大山（出身不明）で、私の班には四人いた。同じく入隊した中に大連で新聞記者をしていたという年配者がいたが、強度の近眼と四十キロ台の体重で三八銃を持つとふらつくような人だったが、こんな人まで集めたのかと気の毒でもあった（さすがに一月を経ていなくなった）。記憶ではもう一人年配者の開拓団出身の椿さんという人もいた。

部隊の半分は国境の陣地構築に出かけ、留守部隊のようであったが、それでも関特演（関東軍が対ソ目的でデモンストレーションした昭和十六年の演習）帰りと称する兵長がにらみをきかせ、鳥取県出身の古参上

等兵が気合をかけていた。一等兵は北海道出のこれまた体格のいい連中が頑張っていた。概して軍隊ではいわゆる学校出を目的の敵のようにいじめる傾向がある。それだけに誰にも負けるもんかというひそかな闘志は持っていた。

中隊長の最初の挨拶で「飯はゆっくり食べよ、ただしその後の行動は機敏であれ」と言われたことを覚えている。また、その頃は内部も相当変わって、初年兵にはピンタを張るなど言われていたそうである。とはいえ起床から就寝まで気持ちの休まることがないのが軍隊である。初年兵は一期の検閲が待っていた。従って、一緒に入った同年兵も言うなればライバルで、彼らに負けない気持ちが一日中つきまわっていた。

#### 一期の検閲

検閲の科目は学科、銃剣術、射撃、内務で、その総合点で甲種幹部候補生の資格が出来る。それに足りなければ、乙種候補生となる。昇級階段の一步である。期間は三カ月である。しかし私にとっては、建国大学で既にやってきたことだけに、内務以外はあまり苦労

はなかった。

学科は問題なし、銃剣術は後では班長の助手を務めた。射撃は「キョウシヤク射撃」といって、四発の弾をどれだけ集中出来るか、また弾が離れても縦の線上にあれば点数が良かったが、まぐれ当たりか四発の弾が三発集中し、一発だけが直下二センチ平方くらいのところに当たり、それが最高点だった。中隊の名誉だということではビール二本を頂いた。

内務はやはり気配りというか、いやらしいほどにへつらうようでいい気がしなかったが、そんな感情を殺してしなければならぬ。たとえば演習が終わればすぐに班長の所へとんでいって巻脚絆（ゲートル）を取り、巻き替え、タオル等の取り替えや洗濯をするように、気を使うことである。使役と称する雑役は真先に引き受ける等、動いていることが目立つことである。おおよそ気のつかない私であったが、苦労とは思わなかった。

検閲の最後になって、人事係の伊橋曹長の口頭試験があった。彼は私に質問をした。「お前はどの検閲で

落ちたらどうするか」。落ちたら乙種を受けます……：おそらくこんな答をするくらいに思っていたと思う。

私は答えた。「私は絶対合格します」。彼はまた尋ねた。「もし落ちたらどうするかとわしは聞いているのだ」。再度私は答えた。「言葉を返すようですが、この試験に合格者がいるのでありますか?」。彼はさも面倒くさそうに「もちろん合格者はいる」と返事をした。私はすかさず言った。「一人でも合格者があれば、私がおの合格者になります」。彼は「ようし」と言っていて満足そうな顔をした。なにしろ満点をとったそうである。

昔海兵の受験で、身体検査の際に身長が三センチばかり足りない男が、「これでもか」と言ってみ先を上げて合格線以上に達し合格したことを思い出した。

検閲の期間は無我夢中で過ぎしたが、演習に出かけ、匍匐前進、対戦車訓練に汗を流し、休止時間を仰向けになって、北滿の草原で雲の流れを見ると、つい感傷的になったりした。

「あゝ青空よ飛ぶ雲よ 恋し故郷の山や河

思いは胸に溢れ来て 偲ぶ野戦は夢のあと」  
昔覚えた歌謡曲の一曲がふつと出てきたりした。

営舎の近くの小高い草原であったが、小さな花が咲き、草原からキジが飛び立ったりして驚かされた。夜間になると信号灯の青白い曳光は何の合図かはわからなかったが不気味だった。

#### 部隊の移動

七月に入ると部隊の人数がまた減ったように思え、私が衛兵に立つようになった。また、この時期に、朝鮮から新しく入隊してきた。彼らはどこから集められたか知らないが、直に逃亡事件が頻発して、毎晩のように非常召集がかかった。が彼らの何人かは捕まり、営舎に入れられた。ある当番のときに彼らに逃亡した理由を聞いたことがあった。「どうして逃げる気になったの」と聞くと、たどたどしい日本語で泣きながら「わたしは先月結婚したが、とにかく軍隊は嫌で逃げた」「しかし君たちも日本人で、日本は今死に物狂いで戦っているのだから、自分の勝手には出来ないじゃないの」「わたしは違う」「何が違うの、同じ日本

「じゃないの」と言ったが、話が長くなるのと、話すこと自体がタブーなのでやめたが、どこか無理のある説得力のない私の考えだったようだ。

七月の半ば過ぎにやはり衛兵勤務の際、音部上等兵（岡山出身）が休憩時間に突然に「加納、日本もこれじゃあ負けるな」と言ったので、私は「はあ」と言ったきり、あぜんとして彼の顔を見た。「なに、日本が負ける？ 理由はうまく言えないが、ここに未だ関東軍が健在だよ、何を言っているのか」口には出さなかったが、私の気持ちだった。今から考えてみると、部隊の移動、物資の漸減、新兵の逃亡に手を焼く、幹部の動揺等、鶴崗の部隊内部でも暗雲が立ちこめ始めた。

軍隊組織は異様なところであるが、平時と違い内部の陰湿ないじめや、それまで聞いたようなことは体験しなかった。一回だけ全員の見せしめとかで、皆が殴られたことがあった。「ウグイスの谷渡り」「ペーチカへの挨拶」とか、廊下で水を入れたバケツを持って立っているようないじめ方はなかった。これに反抗す

る意味で「反動を取ってやる」といった事例も見なかった。

ただ、要領よく立ち回るとは必要だし、組織の中ではこれの出来る出来ないで大差が出た。また員数合わせも要領と裏表で必要だったことも、生き抜く智慧かもしれないかった。

この時期、食料については、さすが軍隊だけのことはあって米飯だったが、一般の家庭では配給は不十分で、市場にはない物は、闇には出回っていた。

## 二・関東軍の崩壊（動員から入ソ）

八月九日、突然の非常呼集でたたき起こされた。

「ソ連軍が国境を突破した！ 全員装備して営庭に集合せよ」一瞬眠気が素っ飛んだ。いよいよ来るべきものが来た。「慌てるな、慌てるな」と自分で自分に言い聞かせながら、バタバタと動きまわり、次から次の命令もどうしたかわからないが、三日分の乾麵包と朝飯、実弾を貰い、一装と称した軍靴（軍では戦時の際には靴底を三本の糸で縫い上げた物を言った）を履いて全員が整列し、点呼して部隊が発射したのは九時頃

だった。

もう営門には歩哨もなく、全員が引きつった顔で兵舎を後にした。振り返ると兵舎からは黒煙が見えた。

それは今から勇躍して前線に向かう雄姿ではなく、かのナポレオンがロシアから退却するに似た姿だった。

ソ連軍はソ満国境を雪崩を打つように進撃し、その前には関東軍もなす術を知らなかったという。

部隊の指揮は野呂曹長（伊勢出身）で、どこへ向かっていくのかわからなかった。その日は真夏の太陽がギラギラと照り、完全武装の重みはしばらくすると肩に食い込んできた。

隊列もいつしか崩れ、小休止のたびに持ち物を捨てて人がいた。肩に担いだ銃はいつしか天秤棒のようになり、平素威張っていた古年兵が最初に音を上げたのは皮肉だった。

満州の田舎道の両側には、唐黍と高粱が背丈くらいに伸びており、水の補給は唐黍を剣で切り、茎の水分を吸っていた。途中の部落を通るときは中国人達、朝鮮人達の射るような目を見た。彼らの一部が暴動を起

こしているというので、隊列から離れないよう注意もあって、落伍をしたらおしまいだと思いい先頭を歩いた。

たしか出発してから五日くらい歩き続けたと思うが、行軍途中に、はるか先方に「カーン」と金属音がして、見ると友軍ではなくソ連のカーチスが機銃掃射を始めた。「伏せろ」とか「道端に散れ」とか聞こえたので慌てて畑に飛び込んだが、ミシンで縫うように弾が飛来し、馬が総立ちになって、中には「ヒヒン」と立ち上がりながら倒れる始末だった。こちらは反撃の術もなく身を隠すのに精一杯だった。

兵士にはわからなかったが、部隊は方正に向けて撤退をしていたのである。この間の出来事で記憶にあるものを書きとめる。

#### 中国人部落に泊まったこと

何日目のことか場所もどこか定かではないが、中国人の部落に入った時のことである。夕方近くに到着し早速夕飯の支度となったが、米は炊けるがおかずがない。Y上等兵（鳥取出身）と二、三人の初年兵が微発

に出た。それは身辺の危険もあることから、銃剣を付けて、ある農家のドアを開けさせ、身ぶりで家畜を出せということだった。Y上等兵は相手の言葉がわからず、いら立って銃床で床を叩いて脅したが、家族は怯えて部屋の隅に立ちすくんでいた。母子のおびえた姿は今もって目に焼きついている。軍隊では徵発というのは略奪のことかと思つた。

中国人の家は周りが高粱の垣で囲つてあつた。晩のご馳走ということで、豚を銃殺して料理したが、日が落ちて真つ暗となつて、次第に料理も大きっぱになつたのか、豚汁というのに喜んで食べると、歯ブラシの先のような肉がやたらに入つていた。また、夜にトイレを探したがどこにもなく、中国人に尋ねると庭の隅でやれと言う。それではというので、しゃがんでみると、後ろから凄い鼻息のような気配を感じた、かと思ふと途端に、尻が突かれて扉まで飛ばされた。びっくりして眼をこらし透かしてみると、なんと大きな黒豚が私の出した物を食っているではないか。自然は循環していると改めて感じた。

#### 行軍中の忘れ物

中隊の隊伍はどう乱れても戦時ということであれば、それこそ命をかけて集団で行動しなければならぬ。列を離れ落伍することは自分の命を失うことである。

二日目からだと思うが、どしゃ降りの雨に見舞われた。満州の壁土のような道が、多勢の人が歩けば、土をこねるようになってぬかるみ、一足歩く度にぼこっぼこつとする。

足には血まめができる。そして一装といわれた靴の踵が取れる始末だ。踵があつての靴だが取れば歩きにくい。空腹と疲れで頭がもうろうとしてくる。

#### 歌謡曲の一節

「何処まで続くぬかるみぞ……」

また、「麦と兵隊」の

「戦友を背にして道なき道を 往けば戦野は夜の雨  
濟まぬ濟まぬを背中に関けば

馬鹿を言うなとまた進む 兵の歩みの頼もしさ」  
の文句が頭をよぎる。「休止」の声がかかると地べた



に座り込む始末である。そのうち、「出発」の声で歩き出してしばらくして防空マスクを忘れたことに気づいた。一瞬血の気が失せるような思いだった。早速野呂曹長に報告し、馬を借りて取りに帰りたいと申し出た。曹長は言った。「馬は貸すことはならん。また、取りに行くことで隊を離れることはならん、今は戦時であるからもうそれでよい」そして「これを使え」と言って自分の物をくれた。平時ならば営倉ものなのに、またどんな目玉を食うかとびくついていたので、その一言を聞いてすっかり感激した。

#### 悔恨

我々の隊が歩き続けているとき、開拓団の一行にすれ違った。一行といっても老人子供の群れと言った方がよい。彼らは本当に着の身着のままに僅かな風呂敷包みを持っているだけで、今にも倒れそうに歩いてきた。と、そのうちの一人の老婆が私の左足にとりすがり「兵隊さん、どうかこの子を助けてやってください。私はもう動けないのでこの子を一緒に連れて行ってください」と哀願した。初年兵の私にはどうすべく

もなく言った。「おばあさん、元氣を出してください。今連れていけと言われるが、今から前線に向かって戦わねばならないので、助け合って頑張ってください」これだけ言うのが精いっぱいだった。見れば男の子は幼稚園くらいの年だろうか、泥まみれで荷物さえ持っていない。また老婆も裸足で着物も泥だらけで風呂敷包みを持っているだけで、ポロ屑のように全く疲れ果てている。置き去りのようにして彼らと別れたが、その後どうしただろうか？

しかし、今でも後悔に似た思いが取れない。あの人はどうしただろうか？何故名前ぐらい聞かなかったか、もしかして残留孤児になったのではなからうか？たしか彼らは方正の開拓団の人達ではなかったか？いつの世でも戦争は一番弱い者にしわ寄せがいく。後でわかったことは、敗戦間際の軍の作戦では一般人は既に捨てられた存在だったのである。

さて、方正に着くと、既に多くの部隊が集まっていた。方正は松花江河畔にあった兵站地で、軍の物資が見上げるような高さで積み上げられ、アンペラで覆い

がしてあった。久しぶりに食事にありついたものの、いろいろな人の流言があつて、これからどうするのか幹部でもわからなかつた。野外の天幕ではあつたが歩き疲れを取つた。

結局歩いたのは三五〇キロくらいか？

### 武装解除

八月十六日、全員集合させられ、そのときに終戦の発表があつたが、これが誰に言われたか記憶がない。そのあと武装解除というので、身につけた武器弾薬は全部集められ、山積みになされた。

ここにこれだけの物資があり、これだけの兵隊がいるのに何故ソ連の前に武装解除しなければならないのか、悔しさに涙が出て止まらなかつた。

戦争は終わったのでほつとしたと言う者がいたが、この馬鹿者が何を言うかと思うくらい腹が立つた。兵隊は素手になつたが、将校は軍刀を離さなかつた。しかし武器を持たない軍隊には中国人から石が飛んできたり、罵詈雑言を浴びせられた。日本の軍隊が味わる屈辱的な二、三日を過ごした。このときには部隊の幹

部は見えず、その後も現れることはなかつた。毎日晴天が続いたが、北満は秋の気配だつた。

かつて胸を張つて歌つた関東軍の歌は幻のごとく消えた。

### 「関東軍の歌」

「暁雲の下見よ遙か 起伏はてなき幾山河

我が精銳のその威武は 盟邦の民今安し

栄光に満つ関東軍」

### 三・苦海（入ソ）

#### ピラの生活

八月の二十三日くらいかと思うが、方正から何隻かの船に乗つて松花江を出発した。三百人ぐらいたろうか、日中は甲板に上げられ、甲羅干しのように直射日光に当たり、のどが渴いても水もなく、ひもで飯盒をつるして河の水を汲みながらのどを潤したが、片方では放尿をしている始末で、何とも不衛生きわまりない状態だつた。船は河を下り黒龍江まで下つて、遡上し始めた。船脚はそんなに速くない。吹き抜ける河風はもはや秋の気配だ。初めは甲板に飯盒で飯を炊いてい

た者もいたが、それもなくなった。ソ連からの配給で初めて黒パンを手にしたが、バケツの型で作ったような丸型で、すっぱく、堅くまづかった。対岸に上陸するのに何でこんなにかかるのかと思うほどに、ソ連からシベリア鉄道でナホトカに出るとか、いやもつと奥地に入って労働するとか、いろいろな憶測が流れ飛んだ。

九月三日、船が停まり上陸することになった。ここはどこだと聞くとレニンスキーだと教えてくれた。貧弱な栈橋を渡って土を踏むと、これがソ連か、空気も変わったような気がして感慨を新たにした。辺りを見ると二、三の婦人が川べりで洗濯をしていたが、日章旗をネッカチーフにしているではないか。驚きとともにどうしてだろうと思った。

川岸からは人家は見えず、ポツンと屋根の葺いてあるところが今日の寝場所だという。それは馬小屋で、露をしのげるが多勢は入らない。後は天幕を張り、馬小屋の乾草を敷いて寢床を造った。もちろん上陸したときから歩哨は自動小銃を小脇に抱えて警戒を

している。これが捕虜なのだと自分に言い聞かせた。

レニンスキーから貨車に乗せられたが、家畜並みの輸送で、ソ連ではあながち特別なことではなく、内には床に座り込んで、横になるスペースもなく、二十〜三十センチくらい戸を開けて採光をしていた。列車は、走ったり、ともすれば長時間停まったりしたが、方向は西に向かつて走っていた。付添いの歩哨に尋ねると「東京ダモイ（帰還）」と言う。彼らに英語で話したが全く通じない。この間、口時も忘れ、記憶は定かでない。

昼頃列車が到着し降ろされた駅はビラであった。全体の人員は三百〜四百人くらいだったろうか。駅の周辺には人家が見え、それなりの施設もあるようだ。そろそろと連れていかれた途中に女囚の一団とすれ違った。彼女らは「ヤボンスキー……」とめいめいに叫んでいたが、笑いながら冷やかしているようだ。町中を通り抜けるとビラ河がはるかに望める郊外に収容所が見えた。収容所の先に材木置き場が、また近くには製材所があった。周囲を二重のバラ線に囲まれ、四隅に

望楼があり、入口には歩哨室、隣が将校室、離れて兵舎（カザルマー）があった。早速部屋割りが決められ、めいめいの寢床に乾草を敷く。（ついでに書くと、三年半のシベリア生活での寢床はいつも乾草で、「シベリアの体験記」の写真にあるようなマットには出会わずじまいである）

トイレも、穴を掘って丸太を一面削り、それを渡して作った。晩飯は遅くなって食べたが、その晩は悲哀・不安で眠れなかった。翌日半分くらいの人数が他のところへ移動し、二百人くらいが残った。

さて、ピラは、ハバロフスクに近くピロビジャンの東側に位置する。かつてはユダヤ人自治州だった隣のピロビジャンは州都である。ピラ河に面する材木の集散地であり、かつ囚人町でもあった。町から二十キロ離れたところに収容所があって、かつては囚人達の働き場だったらしい。人柄もあまり良くなく、人々は警戒心をもって見ていたようだ。

ピロビジャン地区には関東軍直轄一一二、一一二二、一一四、一二六、一三四、一三五師団が入っており、

大体が伐材に従事したようだ。

#### ピラでの仕事

氷が張るようになると湿地帯が凍り、道路に自動車が行れるようになると伐材が始まる。自動車で運ばれた材木は町の集積場に積まれ、それから貨車に積み込まれる。材木は松（日本の杉のように真っ直ぐ）が主で、直径二十〜百センチの生木で、二メートルと六メートルの長さである。仕事の細部になるが、山で伐材し、下の駅の集積場に集め、それを貨車に積み込む、この一連の作業が主たるものだが、貨車積みは夜中時間帯で行われるため、寒さ、防寒具等での身のこなしが不自由で危険が伴った。また、日本人は重い物を肩に担ぐが、これは力と要領がいる。ロシア人は抱き抱えるだけに腕力があつた。

ようやく寝ついた頃に、引込線に入る貨車の悲鳴に似た汽笛が鳴ると、ソ連の歩哨が部屋の中に入ってきて、「ダワイ！ ビストリー！（早くしろ）」とわめきながら兵隊を追い出した。作業場では民間の監督（ナチャーニックと呼ばれた）、背の高いわし鼻の初老の

男が、口うるさく指示し、また若いソ連の歩哨が自動小銃を肩に担ぎながら監視していた。

一方日本の将校は、たき火にあたりながら、作業進行を見守っていた。

### 食事

一番の楽しみは食事であるが、朝はパンとスープ（目玉が映るというので目玉スープと言った）、昼飯は飯盒に半分くらいの九分粥、晩はパンにスープ（多少肉が入っていたかな）、また煙草は一日一人四本だった。糧秣は二日ごとの配給だった。

パンの厚さは今の一斤六枚切りくらいで一日の量は三五〇グラムだった。

この時期は、まだ材木の降ろしや貨車積みが本格化しておらず、いろいろな雑仕事をこなした。仕事の割り当ては人事係の曹長が決め、健康を勘案しながら割り振った。

私の経験した仕事を列記すると、農場、糧秣倉庫、パン工場、個人宅の薪割り、線路工事、電気、人工で、楽そうに見える電気は失格で、食べるものに関する

る仕事は役得があった。ただ、この時期に満州より持ち込んだ大量な糧秣が入り、その手伝いをしながら高粱をかすめてきて皆で食べたので、空腹感はなかった。

それも一時で、徐々に食料難を迎えるとともに、苦難が訪れる。

### 衛生状況

入所当時は下痢患者が多かったが、さしたる薬もなくパンを黒こげに焼いて食べていた。同年兵の中川が下痢が治らないままに死んでいった。外傷はヨードチンキだけで、一番困ったのは凍傷だったろう。収容所で手におえない患者はピロピジャンの病院へ入院した。風呂は一週一回くらいだが、風呂といってもサウナ式で、せいぜいバケツに一杯のお湯があればいい方で、下着の洗濯も不十分のために、虱がわいた。

風呂（バーニャ）に入る時、貴重品は盗まれた。特に狙われたのは腕時計だった。

また、宿舎は消灯すると南京虫が出てきて悩まされた。それは暗闇で虫の動く音がした。私は切れ痔にな

り、当時の衛生兵の佐藤上等兵（旭川出身）、小椋上等兵（小樽出身）には随分とお世話になったが、薬もなく、休みを取っていると治まり、軍医の当番日には見せてもわからず「ニチエボー（なんともない）」という診断で翌日はまた作業に出された。また、冬の大便は寒さのために糞が山盛りになり、それが凍ると尻に氷が突き刺さるので、日曜日になるとボールで山を壊したが、作業を終えてストロップにあたると、外套についた糞埃が解けて異臭がするので、皆が鼻をつまんでいたことも不衛生極まりないことだった。

#### 日常生活

朝は六時起床、飯缶（バツカン）で飯上げ（軍隊では食堂へ飯を取りに行くこと）を行い、朝食を済ませる。終わるとまた昼飯を入れてもらうために飯盒を持っていき、それを班に持ち帰って皆に渡す（これらは皆初年兵の仕事であった）。

八時に作業に向け出発し、作業をしていると歩哨が昼食時間を知らず。一時間の休みで初めてくつろぐ。三時に少し休んで五時までの仕事であるが、ノルマ

（仕事の割当量）が済まなければ終わらない。日が落ちる六時頃帰るが、山では日暮れが早く帰り道は真暗で、鳥日になったときには山道につまずき、後ろからは歩哨の怒声でどつかれ、このときばかりは情けないやら悔しいやらで、捕虜の悲哀を味わった。

六時過ぎに晩飯を取りに行き（これも初年兵の仕事）、食事を済ませて、古年兵の飯盒まで洗ってやっと一日が終わる。日曜日は休みであるが、自分らの環境回りの仕事があり、その雑役はこれまた初年兵が使われる。

持ち物は着替えの下着と洗濯石鹸、鋼を拾ってカミソリ代わりとした髭剃り、歯ブラシと箸くらいで、よくまあ耐えたと思う。私には何よりも紙が大切で、痔の出血には欠かせなかった。

#### 四・反軍反抗

中隊がピラに移動したときは、かつての軍の組織そのままが入って、上下の規律が保たれていたが、そのうちに仕事にも食糧にも不釣り合いがあれば当然不満が生じ、また命令がソ連から日本の将校を通して

伝えられるので、もはや軍の幹部の、存で兵士を動かすことが出来なくなつた。食糧の不足は飢餓状態をもたらし、人間の欲望だけとなり、勢い組織が崩壊せざるを得なかつた。

私の班には初年兵が四人いた。その上に一等兵、上等兵がいて班長がいた。班長の寝所は上段で、下段にはT上等兵と初年兵全員がいた。T上等兵は北海道出身で元博労をしていたそうである。いわゆる柄の悪い部に属する人だつたし、我々はびりついていた。また、S一等兵はやはり北海道出身ながら、中肉中背で、少し我々に対しては威張つていたが、T上等兵には卑屈にゴマをすつていた。

T上等兵は班に分配される食事を下で仕切り、大きいパンを自分のナイフを出して切り、分配をしたが、班長や自分には大きく、眼を離すとその隙にパンを毛布内に隠すような人だつたが、誰も面と向かつて言えないし、また上にいる班長には分からなかつた。

食事の量は次第に厳しくなり、兵士たちの体力も日に日に落ちていき、作業に行き来するにもうつつむき加

減で、道端に食べ物らしき物が落ちていれば拾うようになつた。冬の馬鈴薯は馬糞と似ており、馬糞を間違えて宿舎に持ち帰り、いざ暖炉で温めてみてはじめて馬糞だとわかつたような笑えない話が現実にあつた。

この時期に与えられたパンまでが公平でなく、また他の班よりも少ないことに初年兵は真つ先にバテるんじゃないかという危機感を持ったのは当然だつた。そこで、このことをそれとなく言つて貰うのにS一等兵を選んで、大勢では大げさになるので単独で頼んでみようと思つた。

ある晩の就寝前に戸外にS一等兵を呼び出した。外は暗く冷え込み始めた。それだけに彼は初めから不機嫌だつた。私は彼に今までのいきさつから話し、我々の願いを述べた。「呼び出しの件は、食事の分配ですが、見たとおり上等兵殿が分配されていますが、非常に不公平で、見ていないと隠すようなこともありません。また他の班よりも少ないと思ひます。いい悪いを言うべきではありませんが、といつても我々のそれこ

そ死活の問題でするので、それとなくうまく言って貰えないものでしょうか？」「お前はこの俺に指示をするつもりか！」「決して指示などではなく相談です。ただ、このままだと我々初年兵は最初に倒れてしまします。それでお願ひしているのであります」「お前たちは上の者にたてつく気か！」そう言うやいなや「お前は初年兵のくせに生意気だ！」と言って殴られて、眼鏡が吹っ飛んだ。星一つの差がこんなに差別されることに我慢が出来なかった。私は「よーし！ この襟章取れば文句ないだろう」と言って、自分の襟章をちぎった。

それから二人の取っ組み合いが始まったが、どれくらいの時間が過ぎただろうか、頭上で「お前らは何をしているんだ」という声があった。声はまさしく初年兵教育時の狩野班長で、彼はどちらの言い分も聞かず別れさせた。本来ならば私が責められるべきだと思うのだが、私の肩を持つてくれたようだ。

その晩はそれで収まったが、翌日からはS一等兵の同年兵の一斉のいじめが待っていた。同期意識という

べきか、手こそ下さなかったが、仕事での仕返しがひどかった。重い丸太を担ぐとき、貨車積みを一緒に行うとき、徹底して相手にされて、そしてそれらの原因もあって痔とヘルニアで苦しみ、作業中にしゃがみこむことはあっても、休む余裕は与えられなかった。もちろん食事の改善はなされなかった。

体力が目に見えて衰え、しかも持病で苦しむのと毎日の仕事を考えると、ここで殺されるんじゃないかと絶望的になった。

しかし、各地で起こったこのような事件が、組織そのままに入ソした部隊にはもつと悲惨に進んでいたことは間違いないかった。軍の将校達が離れ、部隊の離合集散によって混成されたときに軍からの解放があつた。

##### 五・戦陣訓の呪縛

昭和十六年陸訓第一号（戦陣訓）『名を惜しむ』の項に「生きて虜囚の辱しめを受けず、死して罪禍の汚名を残すなかれ」とある。この一文の呪縛により、死に至り、または死に至らざるを得なかった青年がいかに



に多かつたことか。

ジュネーブ条約も知らず、もちろん「捕虜の処し方」など分かるはずがない。戦前教育の純粹培養で育った私には、部隊が無為無策のうちに捕虜となり、しかも強制労働をさせられることに我慢が出来なかつた。加えてピラでの古年兵への反抗によって痛めつけられたために、何とか脱出出来ないかと思つてゐた。

そんな時期に同年兵の中川（大阪出身）が下痢で死亡し、また、ある一等兵が便所に行こうとして戸外に出た便所に行かず、バラ線の囲いの所で放尿した。望楼の歩哨がとがめたが、言葉が通せず銃殺された。

ちようどそんな状況下に野呂曹長（伊勢出身）の逃亡計画を知った。彼は温和な人柄で、壮士風なところがあり、「生きて虜囚の辱めを受けず……」を常に部下に諭していた。また、作業に出ても、監督や地方人と話をしながら、しきりに地形や地理について尋ねていた。また、対岸の黒河の陣地構築をしたので、対岸にさえ渡れば何とかなるとも話した（今にして思えば大変無謀なことだが）。

ピラ河のはるか向こうに山の稜線が見える。あれがソ満国境だと断定してゐたが果たしてそうだったか？

しかし逃亡計画は隠密に進められた。彼は人事のほかに炊事の責任者となり、二日目に受け取る糧秣から少しずつ抜き取り、隠匿し始めた。一方、鍛冶職を一人、作業から外してドスを作らせた。そのサンプルは私が京都で買った「菊一文字」である。これは入隊時から隠して大事にしまひ込んでいたものである。なお初年兵の参加者は当番の村井（同年兵）と私だけで総数三十七人であった。本来は初年兵を外したかったが、渡満したとき中国語を話せる者が必要だったから組み入れられたのである。

準備として毛布で自分の手套と靴下を作っておくよう、決行はピラ河の結氷を見て定める。具体的な行動は、歩哨の交代時期を狙つて、宿舎を放火し、歩哨を殺して河の方向に真っ直ぐに逃げる。詳細は後日連絡をするということだった。

やがて一カ月くらい経過し、その間、野呂曹長は河の凍るのを待つてゐた。そしてその決行は十一月二十

四日と決まった。その当日は、作業を終えると、すぐ準備し、いつになく早い晩飯を済ませ、その後一人一人が炊事に行って食糧とドスを受け取り、戦友に気づかれないように寝ながら靴を履き、脚絆を巻いて、出発の聲がかかるのを待っていた。私の隣に中村君がいて、最後の言葉をかけたかったが、仲間の約束で言えなかった。

しかしこの計画が決行寸前に密告され、驚いた中隊長が直ちにソ連の兵舎に通告したため、夜の静寂を破って非常呼集がかかった。

凍てつくような冬の下で、所持品が全部調べられ、刃物類は小さいはさみまで取り上げられた。その間、将校室よりは「武士の情け」として、俺を行かせてくれ！」という野呂曹長の悲痛な男泣きが聞かれ、「行く者はそれでよいだろうが、残された者はどうなるのか」と赤間少尉や他の幹部が押し止めるのに躍起になっていた。

その声を聞きながら、私の張りつめた気持ちが一瞬にすぼみ、身体の力がなくなっていくような気がし

た。

翌朝、どんよりとした灰色の空で、今にも雪が降ってきた。そんな気配の下で全員が前庭に整列した。点呼の際にソ連の中隊長が首謀者七人を名指しに呼び出し、全員の前で小突きながら連行していった。一行が収容所を出ていった後に、赤間中隊長が全員に何か話をしたが、私の耳に入らず涙だけが止まらなかった。七人の消息はその後音沙汰がなく、また、帰還してから野呂さんを新聞紙上で探したがやはり音信がなかった。昔はよく口ずさんだものであるが、最近では歌うこともない。あの戦陣訓の歌は演習の行き帰りによく歌った。

「日本男児と生まれてきて 戦の庭に立つからは  
名をこそ惜しめつゝ武上ぶじやうよ

散るべき時に清く散り 御国に薫れ桜花」

これは当時から好きな歌だったが、また悲しい思い出の歌である。

#### 六・飢餓地獄

ピラの二十三キロという地点がある。そこは町から

山に入ること二十三キロにあるということである。十二月に入ると病弱な者が集められて山に入った。私もその編成の中に組み入れられ、中村や大山等の初年兵も一緒だった。実際の我々は病弱というより編成人員の不足から入れられたようだ。今までの組織から離れて、新しく編成されてみると、上級者が弱く下の初年兵が元気で気分的には救われた。

収容所は小さな河を上った所で、前に橋が丸太で作られ、裏手は木立がこんもりと覆い、見るからに陰気なで、中は三段ベッドで電気もない所だった。入り口には将校室が別にあつた。仕事は伐材で、二人引きの鋸（ピラー）と手斧（タポール）を持たされたが、鋸は目が立ててなく切れない。小藪をかき分けて目標の木の下で鋸引きし、倒れた木の枝を払い、二メートルまたは六メートルに切り、それを一か所に積み上げ、十立方メートルが三人のノルマである。

一番困つたのは、入ソ当時の服装と靴で、山の仕事と寒さには耐えられなかった。十二月に入ると寒さが厳しく、骨の髄までしみる初めての寒さだった。

寝床は乾草を敷き、三段の下は初年兵の場所と上段は班長だが、中間の古年兵が少なかったのが、何よりの気休めだった。

#### 生活状況

食糧は二日ごとに下からトロッコで山に上げられ、それを終点から炊事場まで担ぎ上げるのだが、力がなく、樽詰めの塩鯿を二人で天秤で持ち丸太橋を渡るのがきつかった。

その頃の食事は、ピラの町にいたときより悪く、これは病人であるために少ないのだと言う者もいたが真相はわからない。腹がすくためにお茶ばかり飲んで時ごまかしをしたり、ある者は飯を更におかゆにして延ばし、一時しのぎをしたりしていた。また、晩になると、炊事が捨てたガラをストーブで焼いてかじっているのを見ると鬼気迫るものがあった。たまに何かの都合で飯盒から離れるような時は、帰ってくると飯盒ごと盗まれていた。

身体が一番最初に変化が起きるところは尻と大腿部で、それから顔の肉がそげる。裸を後ろから見ると、

尻に隙間ができて擧丸が見える。榮養失調が始まると精神失調が伴い、自分が何をしているのかわからなくなる。

物を拾って口に入れる、他人の物を盗む、いつもボンヤリしている、この状態で伐材をしノルマが上がりないうちに残業までして、帰りの夜道を「ダワイ ビストリー！」と歩哨に小突かれて駆け足をする。目が鳥目になっていたために木の根につまずく、これが捕虜なのだと思うと涙が出るほどに悔しかった。

この時分には犠牲者が出た。朝起きて隣の戦友を見ると、もう冷たくなっていたとか、また、晩飯を食べながら倒れ、そのまま息を引き取った人もあった。これらの遺体の始末は、初めは火葬にしたが、後で火葬は駄目だということで土葬にしたが、凍っている土はなかなか掘れず難儀した。ここでは数人の死者があったが、涙も枯れて、名前の記憶もない。

ただ、炊事の裏手のこんもりと茂った木々の下で、暗闇の中、燃える薪は鬼火だった。

人が死ぬと途端に風がその亡骸から離れることも初

めての経験である。

#### 大山君の逃亡

ソ連でもウクライナの旱魃で食糧不足と聞いたが、ともかく働く仕事に比べて食べ物の絶対量は少なかった。ここでも兵士の力をそいだのは何も希望がなかったことである。

大山君は同年兵で、彼の父は関東軍の佐官クラスと聞いた。入隊当時は随分と張り切っていたが、抑留生活をするようになると、人が変わったように動かなくなった。私と話をしても逃げ出すことばかり、私も相づちをしながら、もしかしてという考えもあった。それで三日分のパンの半分を蓄え、枕元に隠したが、四日目に盗まれた。十二月の中旬、突然に仕事場から消えた。作業場でも随分探したが見つからず、一人の欠員で報告された。私はもしかして逃亡と思ったが、考えてみれば、山に逃げればオオカミのえじきだろう。また、河に沿って町へ出ても、様子からして直ちに捕まるだろうと思った。

案の定翌日捕らえられて収容所に戻され、歩哨の隣

の犬小屋のような営倉に入れられた。作業に出かける時には声を掛けて「大山、元気を出せよ」とか「身体に気をつけろよ」とか言ったが、放心したように無口だった。

そのうちに誰かが「あいつはロシア人と同じ飯を食っているぞ！」と言うので、いつしか「捕まる覚悟で町へ逃げて、逃げた理由を腹が減ってどうしようもないと弁明すれば、今よりは食わしてくれるわ」と話し合ったが、さてその後大山君はどこへ行ったかわからない。その後、逃亡の話は誰もしなくなった。

#### 毒セリ中毒事件

どうにか正月を迎え、本田少尉の新年の訓示の中で「希望を持って帰還を待とう」という言葉があったが、「それまでもたないよ」と兵士は苦笑した。

三月の初め頃だったか、河ふちの雪も少なくなりかけたとき、日曜日に舎内で演芸会が催された。真ん中のドラム缶にガンガン薪をくべ、真っ赤になっていた。我々の班でも腹が減ってしょうがなく、お茶でも沸かすかというのでドラム缶の横に飯盒を掛けてい

た。

そのうち二、三人の人達が川辺でセリを摘んできたという。「ちょうど人参の先のようにだ」と言っても飯盒を掛けた。

「あいつらはうまくやったね、こちらはしょうがない、お茶でも濁すか」と話しながら演芸を聞いていた。それから三十分くらい経っただろうか、突然異様なうめき声と叫び声が聞かれた。初めはわからなかったが、水野曹長のどなり声で「水を持ってこい！塩を持ってこい！」と言われて、全員が総立ちになった。演芸会は中止、患者は見ると全身痙攣を起こし、顔面蒼白で、口から血を吐いている。先ほどセリを煮ていた人達である。「セリを食べた者は皆ここに来て、これを飲め！」と水野曹長がどなっていた。そして早めに食塩水を飲んで、吐き出した者は助かった。

五、六人が絶命し、解剖してみると胃が焼けていたという。また、助かった者も神経系統の後遺症に悩まされた。悲劇というにはあまりにも悲しい出来事だった。

今の日本の飽食では恐らく考えられないことだろう。食欲のトコトンつき詰めたときに、もはや人間の尊厳すら失ったときに、最後に精神の支柱になるのは信念あるいは信仰というか、魂の問題であった。大学の先生がぶざまな姿を見せた。職人肌で学問のない人や、農業でも背筋に一本入ったような人が毅然としていた現実を目の当たりに見ると、艱難に遭ったときこそ人の真価がわかると勉強になった。

## 七・回生

### キルガへ移動

明けて一九四六年の春（四月頃だったろうか）、ピラの二十三キロから百人ばかりが赤間少尉の引率で移動した。今度はどこへ行くのか、何をするのか、わからなかった。

ソ連の歩哨は相も変わらず「東京ダモイ」と言ったが、誰も信じなかった。貨車に乗せられて一日、到着した所はキルガという小部落だった。ここはピロピジャンとピラの真ん中で駅舎がなく、列車の停車する所と言った方がよい。駅から一直線に六メートルくら

いの道幅が山に向かって走っており、二キロくらいの山端にかかる所に収容所があった。途中に製材工場やパン工場、兵舎があり、人家があたりに点在していた。

収容所には望楼があり、また二重のバラ線を張り巡らせて、二棟の宿舎があったが、建物は割合しつかりしていて、電気も明るく、ピラと違って明るい雰囲気のようなのだ。そして近くの井戸に水汲みにやってくるロシア娘を見て、皆が「見ろよ！ 女の子が通るぞ」と言って娑婆気を出した。

しばらくは雑役で過ごしたが、ここの作業監督者は初老の地方人で穏やかで、歩哨も入れ替わり、村の家に手伝い仕事に行っても親切にしてくれて、よかったと思った。

何よりも嬉しかったことは、寒さが和らいできたことである。シベリアでも春の口差しは暖かく、外套を脱ぐようになる。

そのうち二百人くらいの他部隊が来て、聞くとハラダンから来たという。見れば勝又大尉の引率で軍隊組

織そのまま、我々の部隊が統率下に加えられた。人数が多いために宿舎に入り切れず、天幕を張って何日か過ごしたが、直に本隊の大部分は離れていった。

しかし、彼は全員を集めて言った。「日本はポツダム宣言を受諾した。しかし我々は帰還するまで日本の軍隊として行動する」。さらに驚いたことには、我々の部隊にも「一階級ずつ昇進する」と告げた。

我々は襟章を外し、呼び名もさん付けにしようとしている矢先に、何を今さらと啞然とした。いろいろな部隊の離合集散や襟章を外すことは階級をなくすことで、我々初年兵にとっては蘇生する思いでもあった。兵士は階級がなくなり、将校だけが残り、しかも後生大事に軍刀をぶら下げている。

彼ら是对ソについては押しが強く頼りにはなかったが、時の流れの前には絵に描いた武者人形だったが、

キルガ十一キロの思い出

キルガから十一キロの地点に小さな兵舎があった。ここには望楼もなく、また鉄条網もなかった。総人数四十六人？で、赤間さんの引率で歩哨が一人付き

添って仕事をした。

宿舎は二段ベッドながら、山小屋のような中で、今までと全く違ったアットホームな感覚で仕事が出来た。

仕事は新しく収容所を作ることで、馴れぬ大工、左官、ペンキ塗りをした。

建築のやり方は、まず穴を掘り柱を立てる。柱には溝を彫って、少し細めの丸太の両面を削り、一本一本溝の中に入れ横棧としてはめ込み、その隙間に湿地帯から苔を持ってきて詰め込む。次に馬糞と壁土とを混ぜて壁として塗り込む。仕上げは石灰を溶かし塗る。

ロシア人は毎日がノルマがあって、日何本かの丸太を削り一本ずつはめ込むが、日本の大工はそんなことをしない。まとめて削り、建てる際は一挙に作り上げるため、平日のパーセントが少ないが、建前になると一遍に何百パーセントとなるので彼らの驚きだった。また、驚いたことには釘がなくて、八番線の針金を切って伸ばして使ったことである。

あるとき食糧が一回届かないことが起きた。もちろん

ん仕事は出来ないが、今みたいに電話があるわけでもなく、歩哨も連絡に行けず、結局二日間お茶ばかりで過ぐす羽目に遭った。することもないので、お茶でも飲みながら演芸会でもやるかといっていたが、何しろ力が入らない。しかし、このとき赤間さんの出し物、艶笑講談「源平合戦」は絶品だった。

ここでも食事は相変わらず少なく、腹の足しにと野草を採った。ピラでの中毒事件のこともあって、野草は慎重に選んだが、長野や北海道出身の人達をよく知っていて、「牛馬兎の食う物なら何でも食える」と教えてくれた。蕨・ゼンマイはもちろんのこと、道端の雑草まで食べたが、そのうちに、当時は自分が牛馬になったんじゃないかと思うほどだった。

また、松の木を割ると中に松食い虫のサナギが出てきたが、鉄板で焼くと芳ばしい香りがして蜂の子のような味がした。これを焼いていたときソ連の歩哨が見て驚き、アンコールして見せてくれというおまけまでついた。

この時分は草木が一斉に活動する。特に北国のシベ

リアでは春秋の季節がほとんどなく、直に初夏が訪れる。白樺の幹に傷を付けて楔を打ち込み、ゴムの樹液を採るように樹液を飯盒に取って煮つめると、くさみはあるが蜜が出来て甘味の足しとした。

また、ここでは湿地帯に灌木があつて、「コケモモ」と呼んだ甘ずっぱい紫色のぶどうに似た実がなり、それを採るといふ仕事もあつたが、採るより食べるのに一生懸命だった。

こんな生活のおかげで痔の方も良くなり、次第に元氣を取り戻した。振り返って見ると、ここでの三カ月はリラックスした生活であつた。

キルガ二十キロの思い出

十一キロから更に山道をたどつて、あたりが湿地帯と灌木の中の一歩道の山道を歩くと、二十キロの収容所に出る。収容所のすぐ先に湿地帯があり、「ヤチ坊主」と呼ばれる草の根っここの塊が飛び石のようにあり、その間を水が流れてやがて小川となる。「ヤチ坊主」を踏み外すと、ずるずると水にはまり足抜きが出来なくなる。



七月の下旬、我々一行が二十キロに移動した。冬期の作業先遣隊のようだった。それでも夏場は草刈り、材木の皮剥ぎ、宿舎の建築で、しばらくすると他部隊が移ってきた。引率者は東山さん（高知出身）で、また百人以上となった。

ここでも二人のソ連の歩哨が付いていたが、その一人が怒りっぽく、すぐに銃で小突く病的な兵士だった。ある日、草刈りに出かけるために全員が戸外に整列し出かけようとしていた。また病気で休んでいる者に軽作業に出るよう歩哨が命じたが、その出方がのろのろしているということだけで銃殺にした。これには日本の方も抗議して、歩哨を取り替えてもらったが、実に痛ましい事故だった。

また、伐材の最中に、根元わずか二十センチくらいの白樺の木を倒し、その梢が頭に直撃して即死する事件も起きた。二人とも土に葬ったが、顔は覚えているがその名は思い出せない。

#### 草刈り

生まれて初めて見る薙の先に鋼鉄の刃をつけたよう

なロシア鎌で、これで夏草を刈るといいうが全く要領がわからず、また軽石のような砥石を渡され、研ぐと指に切り傷を作るし、研がねば切れない。これでノルマが一人一日一五〇〇平方メートルと聞いて二度びっくりし、とても出来ない作業だと初めから思った。

ここでも草の成長はよく、どうかすると身の丈くらいある。朝はブヨ、日中はアブ、樹の下にはダニで、これに対処しなければならぬ。

ブヨには風呂敷をかぶり、中東の婦人のように目だけを出し、顔にはガソリンを塗り、手足のすき間を防备して十時頃まで作業をする。日差しが強くなるとブヨはいなくなり、次にアブが来る、熊蜂のような大きな奴がくると、初めは怖かったが、これが蜜を持っていることがわかり、そのうちに腕にとまらせて血を吸わせて徐々に叩き取る。そして胴体を真っ二つに裂くと蜜が出て甘味の足しになる。こうなると食うか食われるかである。

また、山の樹の下を通ると、いつの間にか痛みを感じて、見るとダニが食い込んでいる。ダニは柔らかい

ところに食い込み、寧に食い込むと大変だ。無理に引き抜くと頭が残り、これがまたやっかい者である。それで煙草のヤニを付けてゆっくり取り出す。ダニのような奴とはよく言ったものだ。

これで宿舎に帰ると、南京虫と虱で、シベリアの夏はこ奴との戦いでもあった。草を刈ったあと夕方にか所に集め、フォークで山積みし整えて仕事が終わる。

#### 偽画家

ある時、草刈りに付いてきた歩哨が皆に呼びかけた、この中で絵の描ける者はいないかと。誰もが応募しないので、私がやりましようと言って引き受けた。すると歩哨はやおら胸ポケットから若い女の写真を出し、これは私の婚約者でこの通り描けという。

これくらいなら私でも出来ると思ひ、半日をかけて描き上げて彼に見せると「ハラショー（よくできた）」と言う。それでその口は仕事をせずに終わった。

翌日また私を呼んで、今度もまた女を描けという。今度は写真がなく、さてどう描いてよいものか思案を

したが、「ままよ、キルガで見たロシア娘でも描け」と独断して描き、やはり半日がかりで描いて彼に見せると、今度は「プラホイー（だめだ）」と言ひ、もうお呼びでなかつた。

その後東山さんがバトンタッチしたが、彼の要求したのは、歌麿のようなあぶな絵の女を描けということだったらしい。学校でも図画と音楽は苦手の私で、女も知らないのに描けるわけがない。

#### 馬が旨かつた

十一月の上旬だと思ふが、この時期、晴天が続き、木の葉がかさかさ乾くようになったとき、一地方人が収容所の脇道を通り、小川の流れる湿地帯を渡ろうとしたときに、馬が足を湿地帯にとられ、もがけばもがく程はまり込んで、ついに馬を救うことが出来ず、すみず殺してしまつた。

そこで日本人がその馬肉を頂き、炊事はバケツに十三杯の肉を取り、あとの残りは皆で分けた。それぞれの飯盒で煮炊きして、この時とばかり存分に食べた。というより餓鬼のようにむさぼつたと言つてよい。と

にかく旨かった。

さて、しばらくして立ち上がって歩き出し、後ろから名前を呼ばれたので、後ろを振り返ろうとしたが、首が回らなかつた、それくらい食べた。晩飯は肉飯だったが、さすがに食べられなかつた。その後は全員が下痢だつた。

### 伐材

十一月の中旬に入ると、本格的な伐材作業にかかつた。防寒具は新しく支給され（満州から持ってきたもの）、また、道具の手入れに専任者をおき、慣れもあつたが、食糧も少しは良くなり、それなりの態勢が整つた。

寒さにも慣れて、防寒帽子の耳垂れをせずとも耐えられるようになると、そこは勤勉な日本人のことで、三人組んでの一日のノルマは容易で、時には午後三時頃で完遂する者もあり、それがまた刺激になつて、俺も、俺達もという具合に成果を競い合うようになった。そして残り時間は松の実を採つたりした。ここでの松の実は実に美味だつた。

皆が朝現場に着くやいなや、格好な木の取り合いから始まり、まず木を選んで倒れる方向を決めると、その根元に斧を入れて切り込み、その後は二人で鋸引きをする。木は凍っており、鋸の目立てさえよければ、氷を切るような音をたてて切り込んでいく。手応えがあつてやがて木の梢が動き、そのうちにバリバリと音を出して、ゆっくり倒れていく。

根元が回転するかもしれないので、急いでその場を飛び下がり、付近の作業者に「倒れるぞ！」と声をかける。壮絶な木の倒れる音がした途端に蒼穹が見えたと、一種の快感が走る。

とにかく翌春までに、うっそうたる原生林の山が三つ坊主になつた。

また、この材木の自動車の積み込みは、車がピストン作業でくるし、ソ連の兵士が運転し、彼らもノルマを果たすべく一生懸命だつた。時には晩の積み込みもあつて、待ち時間にたき火にあたりながら彼らとカタコトでしゃべり、彼らも気前よく煙草をくれたりした。この煙草はマホルカといつて、タバコの茎を刻み

込んで、それを新聞紙をちぎって巻くが、独特な甘い匂いのするものだ。また、彼らの使った自動車（マシーナー）は全部USA製だった。

#### 収容所の空気

二十キロには二百人以上いたが、将校は皆集められて我々から離れ、下士官が中隊長として加藤さん（秋田出身）が統率し、班の編成は地方ブロックで集まり、私の班では渡辺、川中さん（富山出身）、松下さん（石川出身）等が一緒で、中出さん（兵庫出身）が班長だった。そして手に職のある者はそれぞれの職を生かし、靴屋、床屋、大工、馬番等生活様式は整えられた。食糧事情もまあまあで落ち着き、盗むような者はいなくなつたし、争いはなかった。そしてお互いに助け合い、お国自慢で花を咲かせていた。

ただ煙草が一日四本では、愛煙家には足りなくて、その人達は貴重なパンと交換していた。私も喫煙はしなかったの、石田さん（東京出身）、栃尾さん（兵庫出身）が見えてパンと交換していったが、今思えば気の毒なことをした。

休みには白樺で箸やパイプを作ったり、器用な人はマジャンバイまで作って楽しんで、皆が心のゆとりを取り戻した。加藤さんは休みになると、ヤスを持って川に行き、川鱒を捕ってきた。もちろん歩哨はついていなかったし、それほど信頼があつた。

時々休みには昼食後演芸会があつて、随分と芸達者がいた。今でも覚えていいる人には、梅田さん（青森出身）の民謡、山口さん（長野出身）の浪花節、徳武さん（長野出身）の漫談、西沢さん（京都出身）の映画説明等が印象に残る。

この時の歌謡曲の出し物を記録しておく、一番共鳴を受けたのは次の歌ではなかったか。

「誰か故郷を思わざる」

「花摘む野辺に日は落ちて みんなで肩を組みながら

歌を歌った帰り道 幼なじみのあの友 この友

ああ誰か故郷を思わざる」

「国境の町」

「樺の鈴さえさみしく響く 雪の眩野よ町の灯よ

一つ山越しゃ他国の星が 凍りつくような国境」

「麦と兵隊」

「徐州徐州と人馬は進む 徐州いよいか住みよいか  
しゃれた文句に振りかえりゃ お国詠のおけさ節

ひげが微笑む麦畑」

兵隊節、例えばダンチョネ節、軍隊小唄等みなが好んで唄った歌は、国民歌と違つて哀愁の漂う歌でなかつたか？

また、いろいろな意見を出そうということで、壁新聞を作り、中出さんが編集をした。このとき初めてハバロフスクの日本新聞社発行、タブロイド版の「日本新聞」が届いた。記事の中に笑い話として「マッカーサーとかけて何と解く？」「へそと解く」「その心は？」「朕の上にある」と。活字に飢えたような我々は、一字一句食い入るように見つめたが、あまりにもシヨックな記事だった。

その後の号には参議院の高良とみ氏が、国会でソ連からの抑留者引揚げを取り上げた記事があり、いつかは帰還出来るのだと嬉しかった。

キルガのソ連兵舎の仕事

年が明けて二月頃か、また移動があつて、今度はキルガの村の方へ移つたが、誰が一緒だったか定かではない。地域ごとの編成も崩れ、関川さん（新潟出身）等と同じ班だった。

痔だとかヘルニアとかいうので、人事の平岩さん（鳥取出身）がソ連兵舎の雑役に回してくれた。下士官を含めて十人に満たない数で、炊事長のアスピンカが賄つており、その下働きだった。初めは言葉が通ぜず、手真似でこたえていたが失敗もした。「アスピンカを呼んでこい」というのを、早合点をして衛生兵の所へ行き、「アスピリンを出してくれ」と言つて、本人に持つていくと受け取つてポカンとしていた。

また、馬の係でコールキンという兵士がいた。片目が悪いが柄も悪く、いつも悪ふざけの仕草をしてきたが、その度にアスピンカがかばつてくれた。

あるとき、コールキンが馬そりに大きな豚を縛りつけ、俺と一緒に来いというので、二人が豚にまたがるようにして隣村へ出かけた。十キロくらいの田舎道を

馬で追ったが、さすがに馬扱いは手慣れて上手だ。何だかわからなかったが豚の種付けらしく、その村へ着くと短時間で終わり、帰り道も同じようにして帰った。途中で彼が小便をするので、私に手綱を渡し、これをしっかり持っておれということで、言われたように持っている、トの豚が苦しいのか私の尻を鼻面で持ち上げた。その勢いが強く突然なので前の馬の尻に当たるようになり、慌てて手綱を引いたら、今度は馬が走り出した。コールキンは「ストイ！ ストイ！（止まれ）」と言ったが、小便が終わっていないので動けず、馬は調子よく走り出す始末、すると下の豚が動きが激しくなって綱目が緩み始めた。

さあ、こうなつてはどうしようもなく、仁田四郎が富士の裾野の巻狩で猪に跨ったように慌て、後ろで彼がどなつて後を走っているが追いつけない。そうこうしているうちにキルガの入り口に。とうとう縄が解けて、豚が部落の中へ逃げ込んでしまった。

村の人達やソ連の兵士たちが大勢出てきて、どうにか捕まえてくれたが、その後息を切らしてやってきた

彼は、フウフウ言いながらどなったが、どだいロシア語が通じないからピンとこない。とにかく大目玉を食らったわけだ。

そんなこともあったが、仕事は精を出したのでかわいがってくれ、残りの食事はご馳走になった。彼らの食事は、朝はパンにスープ、昼はそれにご飯、晩はまたパンにスープで割につましく、また量は少ない。ただ、酒は喜んで飲み合ひしていた。

彼らは満腹すると、バラライカで歌い踊った。私が高らかに歌謡曲を鼻歌でやっていると、それは何だと聞いた。歌謡曲は彼らの音律から離れていたのだから。まして小節なんかはトンチンカンで、音楽の範疇には入らなかつたのではないか？

二カ月の仕事のおかげで、身体の調子はすっかりよくなり、持病も出なくなつて本当に助かつたと平岩さんに感謝した。

#### 風呂屋と洗濯屋

ソ連兵舎の雑事仕事が変わつて、内務の風呂と洗濯仕事を専任した。チーフは堀さん（福井出身）と福岡

さん（福井出身）の三人で、収容所の中に風呂場を作り、七、八人が入れるくらいの湯舟を木で作り、三日に一度の入浴を実施、また毎日下着の煮沸消毒をして洗濯した。日本人はまめなのか、所内に井戸を掘り、そこからビア樽で二十杯くらいを汲み上げ、風呂を沸かした。堀さんは背が高いので「二人で樽を担ぐ時是不公平ですね」と言いながら、堀さんが「それだから中程に肩を入れるよ」と言って、水運びをしたことが、今では懐かしい。

また、毎日一人八十枚の下着を洗濯した。煉瓦くらいの洗濯石鹸で下着を洗うと、しまいには指の先がふやけ、腕の力も無くなるが、それはどんな仕事でもあることで不平はなかった。しかし、この仕事で、皆の虱が駆除され、皆の洗濯時間が不要になった。

そのうちにソ連の将校が日曜日に夫婦連れで来るようになった。その時は湯を沸かしながら頭の上くらいの湯槽に湯を張り、シャワーとして使わしたが、彼らは喜んで風呂を満喫していた。タラソフ大尉もありがとうを言いながら利用していた。

この入浴場効果は衛生面で効果が大きく、堀さんの衛生兵出身と几帳面さが寄与した。

また、衛生関係では、広瀬軍医（川崎在住）、武内さん（岐阜出身）、伊丹さん（大阪在住）が活躍し、広瀬さんはキルガの二十キロから十一キロまで出向いて、皆の面倒をみた。

#### キルガの収容所

この年の春に二十キロから下へ降りて、風呂の内勤仕事をするようになってから、身体の子も良くなり、体重も増えて六十キロを超した。所内もいろいろと改善をし、門を入ると左側に倉庫、靴屋、浴場があり、右側には宿舎と、その先には井戸を掘り、その横には上俵を作って相撲をとり、私も禪を締めてその一人となったが、加藤さんから「いいケツをしているなあ」と言われ、それくらい肉がついていた。

収容所の中には医務室や勉強する小部屋まであった。また、この時期には自主的に運営をして、付き添いの歩哨も形ばかりになった。通訳の佐伯さん（広島出身）、馬当番の小田さん（静岡出身）はフリーパス

だった。

そうしているうちに民主運動が徐々に進み始めてきた。加藤さんが中隊長で統率していたが、委員長という名の教育活動部門があつて、各部や各委員が出て運営するように変わってきた。

ここで椎葉さんのことに触れておくが、彼は不寝番という内勤に入つて、毎朝全員が出発する時に見送つて、それからが彼の就寝だった。我々は「椎葉はいいな、積み込みに行かないで……」と冗談を言っていたが、そのうちにすっかり体調を崩してしまつて入院をする羽目になった。夜と昼を取りかえることは健康にはよくないことだ。

もう一つ変化したことに、あれほど皆が喜んでいた休日の演芸会が、ぱったりなくなつた。

この年の暮れに病人だけが優先的に帰還した。帰れるということを感じなかったが、もしもという期待もあつて、本当にもし帰れたら、私の自宅へ知らせて貰えないかと栃尾さんに頼んだ。彼はその年の暮れに帰国し、その後大阪からわざわざ富山まで訪れて、私の

無事を伝えてくれた。家族は陰膳を前に喜んだという。

## 八・奔流

### 理論武装と打倒カンパ

キルガには多士済々、いろいろな人がいた。武智さん（東京出身）や西沢さんが一緒になつて共產主義の研究から始まつた。また、この時期に日本新聞社も論陣を整え、袴田氏や諸戸氏が論説を載せ、反軍闘争、天皇制の打破、共產主義理論の連載をしていた。またソ連の政治部の将校も後押ししていたようだ。

毎晩のように西沢さんを囲んで、ソ連共産党史を一冊置いて、それからの注釈を聞いた。マルクス・レーニン主義とか、弁証法的史的唯物論とかの講義は耳新しかった。若いアクチブが議論をし、討論を重ねていくと、それがやがて燎原の火のように延びていった。太田さん（岡山出身）、水村さん（愛知出身）、添田さん（不明）だったが、その肉付けは武智さんのようだ。武智さんはかつて農民運動をされたとも聞いた。

ともかく西沢氏が中心となり、彼の理論と卓越した



アジが若い人を魅了した。西沢氏は言った。「発展のために自己批判と相互批判が必要でかつ実行されねばならない、まず反軍闘争である」。それは天皇制に連なる軍隊であり、警察であり、官僚である。これらに籍をおいていた者を全員の前で自己批判させることだ。かくして武智さん、平岩さん、馬場さん（佐賀出身）にその鋒先が向けられ、皆の前で打倒された。

（打倒カンパというのは、本人を全員の前に出し、自己批判をさせて、それについて全員から質問なり詰問したりすること）

このことは次の日からは誰からも口をきいてもらえず、村八分になることである。従って人事係をしていた平岩さんが職を離れ、自動車の修理作業をさせられた。

この風潮が若いアクチブの恰好の勉強場となつて、次から次へ行われて恐怖を感じる人もあった。一つの運動が弾みをつけると益々高ぶりをみせ、思いもしない広がり示した。毎朝作業に出掛ける時や晩飯の時に、「同志諸君……」の第一声から始めて、行動隊

員に標的にされた者が全員の前で弁明されられると、中には自分も何か言わないと吊るし上げられるという被害妄想に陥った。そして極端には、自分の横に一緒に寝ていた戦友までも対象にした。密室での興奮状態は常軌を逸する場合もあった。反対意見は誰も言えなかった。

西沢氏の語録。「物事の判断は大衆の為になるか否かによって決まる」「相互批判こそ運動を発展させるべきだ」「水（液体）に加熱すると水が水蒸気（気体）に変化する。即ち量的なものより質的な変化をもたらす。為政者（ツアー）の民衆への弾圧の抵抗が昂じて革命が起きた。これが弁証法的史的唯物論である」

当時理論武装もなくて反抗だけが先行していた私は、愚問をぶつけたこともあった。「日本の義賊と呼ばれる鼠小僧は、金持ちから奪った金を庶民にくれているが、これは正義と言うべきか、不正と言うべきか」と。

その年の初夏の頃、西沢さんと大河原さんが作業部

隊を離れ、クイブシェフカの研究所の専任講師となり、大河原さんはその助手となって徹底した教宣活動に入った。そして我々の部隊からも、一カ月期間で十人の者が選出されて受講に出た。

第一回は太田さん、添田さん、伊達さん（熊本出身）、川上さん（東京在住）、近藤さん（宮崎在住）達で、初めての人達が受講を終えて帰舍した時は、人が変わったように成長し、理論武装されてきた。それから太田さんは委員長となって中隊のヘゲモニーを握った。そして西沢さん譲りのアジで左翼的言辭を弄し、ますます民主運動として煽った。（講師にはその他上田、宮田、近藤の各氏がいた）

#### 指切り事件

私は第三回の受講生としてクイブシェフカに行った。しばらくぶりに見るその専任講師となっていた同年兵の大河原さんは、すっかり人が変わったように思えた。暑い夏、裸になって勉強し、討論し、時には深夜にまで時間を忘れるくらいだった。勉強中の一人が大河原さんに言った。「今、ソ連という内にいるか

ら、民主主義とか、共産主義とか、声高に話しているけれど、日本に帰ればそうもいくまい。共産主義はこだけのものではないか？」と。それ受けた大河原さんは、「それならば、その確信の程を見せてやる」と言って、傍の手斧をとるや、自らの左手指を落として見せた。彼は手に包帯をして講師を務めていた。

このショッキングな事件に対して、賛否両論があったが、いきり立ったような人には冷静な判断が出来なかった。

#### 日本新聞社から視察

こういった事件が起きてこの研修なりあるいは五二二部隊が有名になったのか、ハバロフスクの日本新聞社の幹部が収容所に来た。それを門の入口で受講生が囲み、打倒カンバにかけた。要は新聞社のやり方は生温いということである。幹部の方はまさかこんな形で迎えられるとは思ってもよらず、本当に鳩が豆鉄砲をくらったように驚いていた。

最後に彼らの一人が帰り際にこう言った。「これは極左だ」と。皆がすすごと帰るのを見て受講生は大

満足だった。

### 民主運動（打倒カンバとの闘い）

私達第三回生がキルガに帰ると、早速帰還報告カンバを催し、私が全員の前で開口一番言った。「一カ月離れてこの収容所に帰ってみると、所内の雰囲気は暗過ぎる。我々は今まで民主主義を唱え運動をしてきたが、皆が発言するのに他人の顔色を見ながら、おどおどしている。これが本当の民主主義だろうか？」

この発言が終わるか終わらないうちに第一期、第二期の幹部が自分らの批判と取ったのだから、猛然として反撃してきた。特に第一期の太田さんの反撃はその委員長の地位をかけての必死の攻撃だった。そして歡迎カンバを打倒カンバに変えようという発言も出た。私も負けていなかった。大勢を相手に論争し、小一時間もたったが結論は出なくて、明日の仕事があるというので中隊長がとりなして収まった。そのあと多くの入達から激励を受けた。

しかし最後になって、委員長の太田さんが打倒カンバに遭って退陣し、口舌のインテリは最後を飾り得な

かった。

やはり大衆のリーダーは最終的には人格者であると思うし、いつの時代でも、どんな状況の場合でも、集団のまとめは、知識でもなく腕力でもなくその人格である。

今振り返ってみると、果たしてあのことが本当に民主主義だったのかと思うことがある。それでも私の考えは確実に左旋回をしていた。

### 文化活動

委員会の推薦で私が文化部長を引き受けたが、さて何をしてよいものか分からなかった。労働歌が日本新聞社に掲載されていたのを、音譜の読める土屋さん（千葉在住）に頼んで皆の前でタクトを振ってもらった。その頃の歌を記すと、

「赤旗の歌」

「民主の旗赤旗は、戦士の屍を包む……」

「メーデーの歌」

「晴れた五月の青空に歌声高くなびかせて……」

「インターナショナル」

「起て飢えたる者よ今ぞ日は近し……」（訳は少し違うが）

また、演劇では共作の「蟹工船」「米騒動」を出し物にしたが、小学生の学芸会のように我ながら芳しくなかった。ただ女形の関川さん（新潟出身）が随分引き立った。

また私と渡辺さんが一緒に漫才をしたこともあったが、しまいには打ち合わせの台本を忘れて、アドリブでごまかしたりしたので、逆に受けたことも思い出の一つである。

そのうちに、いわゆる労働歌ではなくて、ソ連の歌が紹介されて片言で覚えた歌詞で歌った。

ここに一九四七年から四八年にかけての歌の変化を見ると、革命歌や労働歌がソ連の賛美やスターリンの賛歌に変わり、我々の仕事が社会主義への貢献であり、スターリンのおかげであるとして、彼に感謝状を送ろうという流れに変わっていった。日本新聞社の目指した意識革命が一八〇度の展開を見せたのである。

一九四八年に入ると自主管理のようで、あまり監視

がなくなり、地方人との交流もおおらかになり、我々の演劇が村の集会所で行われたり、またソ連の映画を鑑賞したり出来た。映画は「シベリアの大地」で、その音楽も良かった。

#### 作業の変化

運動の高まりは作業にも大きく影響した。その頃日本新聞社がソ連の「スタハノフ運動」を取り上げた。これはノルマを大きく達成した個人記録で、これに見習えという社会運動である。日本人は全くの批判もなく受け入れて、アクチブが煽った。従って労働生産はかなり上昇した。当時作業部として若いアクチブが頑張った。川上さん（東京在住）、飯岡さん（横浜在住）、近藤さん（宮崎在住）がいた。

朝の出がけには皆が労働歌を斉唱しながら、気合をかけて作業場に赴いた。

一応平穏な生活が続いたが、毎日の勉強会や討論は欠かせなかった。

#### 九・光風

秋口になるとあちこちの帰国が耳に入った。我々の

帰国（ダモイ）はいつか、寄ると触るとその話が出た。しかし、これに水を差すように一部の人からばかげた噂が出た。いわく「我々は日本に帰るが、承知のように日本は今やアメリカの支配下にある。だから日本へは帰還ではなく敵前上陸なのだ」とか、また「反動分子は帰国させるな」と。現にそうした部隊もあったことも事実であったが、させた人は今どう考えているか？

さて十月に入って、いよいよ帰還が伝えられると、仕事も気もそぞろになったが、反面、最後までしっかりと帰ろうやと言う人もいた。

ちよっぴりと不安もあったが、やはり帰還は本当に実現しますよう祈った。これで列車に乗せられても、帰ってからどうする、こうする話が吠いたが、引き締める者もいて、私はその方だった。

#### 帰国直前の運動

帰国途中でもアジをやったし、また中央委員が総辞任する打倒カンバもあった。私も自己批判をした。また途中で相互批判も行った。

帰国の列車は我々の部隊だけでなく、他部隊と一緒に長く連結していた。途中停車の際に、他部隊と一緒に線路端に降り、他部隊に向けて活を入れてやろうと彼らの車両に行き、帰国の心構えはかくあるべしとアジった。他部隊の連中はボカンとして聞いていた。こやつらは全然聞いていないなと思って、「この引率者は誰か、出てこい」と言ったら、責任者が後ろから出てきた。なんと見れば建大同期の秋田君（西宮在住）で、彼も私も驚いた。二人は涙を流して再会を喜んだ。

ナホトカで海を見て、久しぶりで感激した。三日くらいだろうか、船が入るのを待った。

そのうちに持ち物検査で、書いたものは皆取り上げられた。皆の住所を覚えるしかないというので、しきりに皆の住所を確認した。

ナホトカにおいても未だ革命歌を歌って氣勢をあげている部隊もあったし、また敵前上陸というナンセンスに酔っている者もいた。

ただ最後の土壇場になって、後続の部隊啓蒙人員や

技術者は残れというので、靴の修理をしていた人（名前は失念したが、おとなしい人だった）が残されたが、気の毒の最たるものだった。鬼界ヶ島に残された僧徒寛の思いもかくやと思われた。

十一月の十五日頃か朝嵐丸に遂に乗船することができて、日の丸の旗はまぶしく、船員の「ご苦労様、お帰りなさい」の言葉がなんと心地よく響いたことか。それまで敵前上陸だと言っていた馬鹿な連中は、船中では最早おとなしくなった。そして舞鶴の近く、松の緑が日に入った途端、涙が滂沱として止まらなかった。十八日、船はゆっくり舞鶴に着いた。

舞鶴では米兵二世の徹底した質問に遭ったが、隠すべき何もなかった。

二十三日、僅かな手当と切符を手にして、渡辺、川中さんと富山へ向かった。

#### 十・後書き

今の世の平和をおもえば兵となり

俘虜となりしは前世のごとし

杉本健策

こんな投稿を見た。まさにそのとおりの感慨がある。

私の生家の隣の親父さんは昔の日露戦争に出征した人で、かつてのロシアと戦った話を人人同士で話し合っているのを端で聞いても武勇伝ばかりで、戦争とはそんなものかと子供心に思った。恐らくこんな手記を見ても、孫子たちには面白くもない物語だろう。しかし私にとっては戦前の教育で日本の絶対性を信じ、建大においては民族問題、植民地問題もあったが、日本の優越さを信じ、軍隊では不敗の確信を持ちながら、その日本の絶対の神話が崩れて茫然となり、しばらくは心の真空状態が続ぎ、抑留中は次第に抵抗をしながらもお互いの話し合いのうちに、日本の農民問題や部落問題まで聞き、今までまるで知らなかったことを教えられ、日本の社会構造が一般の国民にとって悪であるという意識変化をして、社会民主主義にこそ大衆の生きる道があるのだという気持ちになるまでは大変なことであった。抑留されて民主運動（あれが真の民主運動だったかと疑問に思うこともあるが）の渦中であって旧軍隊機構から解放され、帰国しても、これからは天皇制を廃し、大衆のために、自己のために赤

旗を進めるべきだと思ったが、やはり温室育ちの運動で、多少の左翼理論を知っている程度では、日本での運動はソ連にいたようには出来なかったし、すごい抵抗があった。そして活動をすればするほど矛盾に悩み、主義と現実のギャップのあまりの大きさに失望した。

それに加えて日本共産党の分裂、社会主義国家のソ連の崩壊、かつてのレーニンもスターリンも、その栄光の像が路端に捨てられる有様である。

工藤さん（青森出身）が言う。「私は今八十歳だが、いたって元気だ。ソ連にいたことを振り返って考えると、色々な事を経験させてくれて感謝している」と。しかし、これは人生に感謝であって、ソ連への感謝ではないはずだ。

また「ソ連の抑留は恨みだ」と言う人もいる。当然のことで、私が経験した以上に過酷な経験をした人も多い。まして、かの地に無念の死を遂げた人は今もまぶたにあって、ご冥福を祈るのみである。

一九九九年七月十日、この日にも夢を見た。いつも

そうであるが、何かの動員があつて急いで整理させられるのに、身に付けるあれがなく、これがなく、慌てふためいているところで夢が覚める。五十年を経てもまだオンブお化けがいるのだろうか？

#### 【執筆者の紹介】

私と行動を共にした時期は、キルガ二十キロ以降、昭和二十三年十一月末、朝嵐丸で帰国（舞鶴上陸）した期間であります。

帰国後、実生活の中ではいろいろと苦勞もされ紆余曲折もあつたと聞き及んでいますが、時代を先取りする聡明な理解力と適切な判断の処世術をもって今日に至っており、ことにキルガ収容所当時の関係者の集まりについては、早くから組織作りに取り組み、その会が今日もなお「シベリア友の会」として存続し、この事務局の仕事も一手に引き受けて諸般の雑事を処理し、毎年定期的に全国各地を巡回しつつ旧交をあたためる催しに尽力されております。

（高知県 東山 林）